

---

# 蒼空のユウ

蒼際

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

蒼空のユウ

### 【Nコード】

N5776A

### 【作者名】

蒼際

### 【あらすじ】

第2次大戦中に撃墜された幽霊戦闘機。それから数十年後、北朝鮮の軍事基地が何者かに爆破・破壊される事件が起こる。

## 箱庭の少女パート1

>>フーファイター『幽霊戦闘機』<<制空ジェットファン雑誌  
評論より

第2次世界大戦時中の戦闘機のパイロットが目撃したという謎の  
戦闘機。

その戦闘機は現代では飛行するのが不思議なフォルムをしており、  
垂直飛行、曲線飛行、ジグザグ飛行などの当時の航空技術では不可  
能な飛行をしてみせて、飛行速度は音速で飛行していた高度は大気  
圏近かった。

その戦闘機は突然現れて、突然消えていくので、当時のパイロッ  
ト達は『幽霊戦闘機』と称したという。

>>第2次世界大戦ミッドウェー海沖上空<<

上空を舞うように消えていく火花に、打ち上げ花火のように炸裂  
していく日本軍の戦闘機に連合軍の戦闘機。

海面を泳いでいる魚雷が海上を浮かんでいる大型軍艦の船底に直  
撃して、軍艦は次々に沈んでいく。

その中に、一機だけどちらの軍にも属さない高速飛行をしている  
黒いステルス戦闘機のような形状が遥か上空にある。

その戦闘機の無線通信回線からは両軍の通信が混じり合って聞こ  
えるため、何を言っているのかわからない。キャノピーには立体映  
像のようなモニターが映し出されており、ミッドウェー海域のレー  
ダーが表示されている。

「降下速度間隔コンマ3・5。サテライト起動から2秒後にジユネ  
レーター左舷、右舷、下部上部とも50パーセント稼動開始。さて、  
終わらせに行くか」

大人びた少年の声がコックピット内に響くと、左右にある操縦レバーを倒して、黒い戦闘機は垂直に降下する。

海上から打ち上げられる火の粉のような対空機銃の弾丸を螺旋状に機体を回転させながら降下させ、左右のウィングの上部に設置されているブースターのような四角い円筒形の塊の先には四角い大きな穴がある。

機体からそれを離脱させた瞬間、明るい虹のような光線が海上に突き刺さり、爆発する。

その直後、一発の砲弾が黒い機体の後部ジュネレーターブースターに直撃して、海上に水飛沫を上げて落下した。

12月19日 21時36分（グリニッジ標準時）

>>北朝鮮チャガンのフィチョン市内<<

季節は冬の12月。人の気配がない廃墟染みたボロイ家並みを走る足音。

そして、その足音を追う数名の足音と、自動式アサルトライフルの発砲音が響き渡る。

「おい、あの東洋人は居たか!？」

「ダメだ!関所の連中が殺されている。巡航型弾道ミサイルすべて破壊されてしまった!」

甲高い男性の大きな声には怒りを感じる。

今から約2時間前。武器格納施設が黒いコート姿の東洋人一人に爆破・破壊された。その東洋人を捕縛・銃殺しなくては、キム將軍閣下に処刑される可能性がある。

その性で、兵士達は焦っている。

「あの東洋人は、一体何者だったんだ?銃弾を全て避けていたぞ!？」

二人の内の一人が、大きな叫びに似た声で言う。

「俺が知るか！今はまず第一にする事は国境封鎖だ。陸・海・空を封鎖して、あの東洋人を射殺する」

もう一人の男性はそう言っと、兵士達は足早とどこかに走り去っていく。

12月21日 11時45分（グリニッジ標準時）

>>北朝鮮国境付近監視関所<<

慌しい様子の関所付近には、完全武装した北朝鮮兵が10名ずつ小隊を組んで、合計8小隊が警戒している。

大きな川を隔てた国境は見晴らしがとても良く、この国境を抜けるとなると、ここは全滅させるか、逆に殺されるかのどちらかである。

昨晚、珍しく雨が降った性で、川の水の流れの勢いは激しく、水の音が五月蠅いくらいに辺りに響いている。

関所付近を統轄している少佐の階級勲章のサングラスを掛けた渋い男が無線を片手に大きな声で、

「これは訓練ではないぞ！もしも施設を破壊した東洋人を逃がすような失態をしてみる！？偉大なる我らが將軍閣下を辱める事になるぞ！」

熱血な男性の声に、応えるように無線から、

『はっ！！絶対に射殺します！』

甲高い男性、女性の声が聞こえてくる。

その時、遠くの方から大きな爆発音が空気全体に伝わったように鳴り響いた。

遠くの枯れ果てた土地からたちのぼる黒い煙幕。これで、北朝鮮兵はより警戒心を高める。

いや、小隊の隊列に綻びが生まれた。

一人の北朝鮮兵の視線と合う赤いレーザーの光。そして、赤いレ

「ザー」が当たっていた額に衝撃が走ると同時に脳漿が噴出して、地面に息絶えて倒れる。

それを合図となったように、次々に一人ずつ確実に頭を狙撃用ライフルの弾丸が撃ち貫いて、一個小隊を全滅させる。

それは、僅か15秒足らずで行われた。

呆然とした少佐の階級勲章の男性はすこしの間、口を開けていると、正気を取り戻したのか無線を片手に握り締めて、

「おい！誰か狙撃兵の存在を確認した者は居るか！？」

そう無線に向かって叫ぶと隣で双眼鏡で辺りを見回している兵士に視線を向けて、

「貴様は何を見ていた！？ なっ！」

言いかけた瞬間、少佐の目の前の兵士の心臓にライフル弾が命中して、その場に血を流して倒れる。

これには、さすがの少佐も言葉を失って、慌てた様子で姿勢を屈めて伏せる。

無線からは兵士の断末魔が聞こえてくる。

『少佐！狙撃兵を確認できませっが！』

『どういふ事なんですか！？目標は一人ではなかった』

次々に全滅していく小隊と兵士の悲痛な最後の叫びが、突然止まった。

少佐は顔を青ざめた。

（ぜ、全滅したのか？80人以上の兵士が……そんな馬鹿な）

内心で思うと、後悔だけが少佐を支配する。 つ！？一発の発

砲音が突然聞こえた。

少佐は恐れながらも、ゆっくりと顔を上げて、周りを見た。

すると、正面に黒いコートに黒い長ズボンに黒いサングラスと、全身黒で決め込んだ年齢18歳程の少年が、狙撃用ライフルを構えて、こちらを狙っている姿を確認した。

確認した次の瞬間、少佐の頭が撃ち抜かれて、死亡する。

少年は狙撃用ライフルをその場に落とすように捨てると、黒い手

袋を片耳を押さえるように当てると短く言った。

「擬似装甲解除と同時に降下しろ」

大人びた声で命令すると、遙か上空から何かが降ってくる。

地面に着地する瞬間に下部ジュネレーターが起動すると同時に降下速度をリセットして、死体の山となった国境前に黒いステルス機のような戦闘機が着陸する。

少年が近づくと、察知でもしていたのかキャノピーが勝手に開いて、少年は何事もなかったかのようにコックピットの座席に座って、キャノピーを閉じる。

メインジュネレーターを起動させると同時に擬似装甲『機体を不可視状態にして、レーダーから完全に消失させる機能』を作動させて、一気に遙か上空に上昇して、消える。

12月22日 16時20分（グリニッジ標準時）

>>ペンタゴン内部<<

ペンタゴンの会議室にはズラリと軍服を着服している軍上層本部のお偉いさんが、各自資料を読んでいる。

>>資料内容<<

『昨日中、北朝鮮上空を巡回していた我が国のスパイ衛星が、北朝鮮国境付近の基地の爆破を確認。それから数十時間後に国境監視関所の兵士の全滅を推測される謎の戦闘機が存在を確認。謎の戦闘機の特徴は以下の通りである。黒い機体で幅は約15メートル縦は約10メートル・垂直離陸に高度維持から高度のステルス機能を搭載していると推測・速度は現代の戦闘機の上である 以上』

情報機関が必死にかき集めた情報に読んだ一人が、

「いい気味でしたな。北朝鮮はこれで、武力の一部を失ったという訳だ」

馬鹿の一つ覚えのような癪に障る嫌な笑い声を上げながら言う。  
「情報局としては、たった一機の戦闘機……いや、一人の人間がこの結果を残した事の方が重大な事であり、危惧するに値する事実ですよ？アルザック指令はどうか考えますか？」

この中の面子で一番比較的に若い男性が、上座に座っている威厳たっぷりの黒人男性に訊く。

アルザック指令は怪訝そうな眼差しで資料を読んだ後、机の上に置いて。

「うむ、まだ結論は出せないが、一つだけハッキリとしている事がある。この資料にある黒い戦闘機はどの国にも属していない。敵とか味方のどちらでもない存在だ。この戦闘機の所在は今のところ全く把握出来ない……完全に消えれる程のステルス機能の高さはすでに未知なモノと言える。悪い方向に言い換えれば、現段階でこのステルス機能を上回るリーダーはどの国にも存在していないから、もしもそのステルス機能を使われれば、国一つは簡単に爆撃、壊滅出来るのだよ。兵器開発部の方ではこの事態をどう見ているのかね？」

落ち着いた声で言うと、今度はメガネを掛けた白人が口を開く。

「我々兵器開発部には、そんな高度のステルス機能は開発する技術はないです。この黒い戦闘機の推測されている性能についてですが、この資料を見る限りでは、こんな戦闘機は現実に実在している例など聞いた事がありません。噂なら、第2次大戦時にミッドウェー沖で目撃された『幽霊戦闘機』の内容に酷似していますが、まさか実在するとは考えてませんでした」

「現在の対抗策は、直接上空を戦闘機・偵察機で巡回するしかないな。この事は国連にも伝えるように。以上だ」

アルザック指令は少ない情報から導き出した対抗策を言うと、会議を解散する。

誰も居なくなつた会議室を、ため息を漏らしながら呆つとするア



ルザック指令はゴールドに近い瞳を細めて、

（幽霊戦闘機の噂なら聞いた事がある……だが、ミッドウエー沖で日本軍戦艦の砲撃が直撃して、海に墜落した、と聞いていたんだが、本当の話だったのか？）

内心で思うと、もう一度ため息を吐いた。

## 箱庭の少女パート2

12月24日15時00分（グリニッジ標準時）

>>ギアナ奥地テーブルマウンテン標高900メートル<<

濃霧に包まれたテーブルマウンテンの頂上付近は激しい乱気流が発生していて、気流は不安定である。

水平になっている場所に、黒い戦闘機が着陸して、エンジンが完全に止まっている。

その戦闘機の右舷のウィングに腰掛けている黒いコート姿の少年の姿がある。

読んでいる資料はすべて英語で記載されており、ほとんどの内容がこの黒い戦闘機の事だ。

>>ブラックゴーストの機体情報<<

『1920年に地中からたまご型カプセルを発見。設計図・装甲材料を詰め込んだカプセル内部には地球の文字ではない不明な文字が刻まれていた。当時の開発に携わった20名の科学者は秘密保持のため抹消する。1924年、未知の技術で開発された黒い戦闘機を>ブラックゴースト<と呼ぶ。燃料は不要。特殊修復装甲の耐久性は非常に高く、自己的に修復されるので、整備は不要。迷彩機能>擬似装甲<を搭載。左右のウィングに装備されている無線式思念誘導兵器>サテライト<を操作するため、搭乗者の両手に思念金属を埋め込む。副作用として、思念金属を埋め込んだ人間の心停止を確認した際に、乾燥を防ぐ保護膜を体内と皮膚に形成させて、細胞の動きを停止させる。これにより、仮死状態になった人間は目覚めるまで、不老である 以上』

資料を読み終わると、少年は資料を細かく破いて、風に遊ばせるように捨てる。

気分はとても悪く、吐きそうだった。

どうやら、まだ体が本調子ではないらしい。

（まずは世界情勢を知る必要があるな。もう大戦は終わっているから、無差別に軍を襲撃するのは、負担があり過ぎるからな）

濃霧をただ眺めながら、少年は内心で思う。

第2次世界大戦時の時は戦争の早々に終わらせるために、世界中を飛び回っていたが、現代はコレで飛び回るだけで大問題になる。平和になった事は良いことだが、先日壊滅させた北朝鮮の末端のような基地はまだ存在している。戦争はいつでも起きる可能性がある。

そう考えれば、ある程度の情報が必要になってくる。

攻撃していい国を識別するために、世界情勢の情報が必要。

危険性のある場所をピンポイントに攻撃するために、軍事情報が必要。

あと、白兵戦用の銃も必要だ。北朝鮮の時は狙撃用ライフルを調達出来たが、他の場所はそうもいかないかもしれない。

ここで、少年のまず第一の目的地が決まった。

（銃と言えば、アメリカかな）

内心でそう思うとすぐにキャノピーを開いて、コックピットに乗り込んだ。ジュネレーターとエンジンを起動させるとキャノピーを閉じて、飛び立った。

乱気流を微塵も感じさせない安定した飛行は高速。

そして、擬似装甲を作動させて、肉眼からもレーダーからも、機体の存在を消失させた。

12月24日 22時32分（グリニッジ標準時）

>>フィリピン上空 高度9000メートル『ブラックゴースト』

<<

漆黒の夜空と分厚い雲に挟まれて飛行している透明化された装甲を纏った黒い戦闘機>ブラックゴースト<の左右のウィングの先は小さな赤と青の光が点灯している。

デジタル化された機体の速度計測器には『時速740キロ：自動操縦モードアクティブ7・4』とこの機体専門の単語が表示されている。

黒い革でクッションをコーティングしている座席に腰掛けながら、サングラスを掛けた少年は赤く薄いガラスのようなモノを眺めている。

サングラス越しから見た赤く薄いガラスにはやや立体映像のように文字が表示されているように見えて、少年はその表示された文字を読む。

戦争前に書かれた誰かの小説をデジタル化した>オークパス<と呼ばれる携帯情報保存機械だ。

これは、ブラックゴーストのコックピット内の武器収納ケースに入っていたモノであり、他に何もないこの場所では、暇つぶし程度にはなるので読書している。

現在の目的地設定している場所は>旧米軍空軍基地<に座標を固定されている。

手持ちの銃器は大戦時前の一昔前のモノしかストックがなく、精度も威力は現代の銃器に劣るため、白兵戦は不利だ。

だが、それと同様にブラックゴーストに搭載されている対空ミサイル・対艦ミサイル・巡航ミサイル・対潜ミサイルの弾頭数が各1発ずつしか残されてないため、補充する必要性があった。

左右ウィングに取り付けられている無線式思念誘導兵器>サテライト<はエンジンにすこし負荷がかかり、チャージの必要性もあるために、ハイスピードの空中戦には向いてなく、空中戦用のレーザーを圧縮して連射する機銃はまだ修復が完了してない。

そのため、このブラックゴーストで実戦で使用出来る兵装はミサイル各種と>サテライト<のみだ。

襲撃方法の選択肢を増やすためにも、ブラックゴーストの弾頭数を補充するのは最優先事項だ。

アラームが3回程鳴った。どうやら、目的地上空に到着したらしい。

操縦を自動から手動に変更され、降下速度を800キロに固定する。

黒い戦闘機は分厚い雲の中を自由落下しながら降下していく。

雲を突き抜けて、地面まで90メートルまで降下すると、下部ジュネレーターを下方に向けて噴射・着陸する。

キャノピーを開いて辺りを見渡した。草木が生い茂り、基地は放棄されて数十年以上経っているようだった。

少年はコックピット内からガソリンとスプレー型のガスバーナーを両手に持って、武器格納庫らしき倉庫を塞いでいる草木にガソリンを掛けて、着火して焼き払う。

赤い炎が焼き尽くす様を眺めた後、倉庫内に足を踏み入れた。

黒いコートのポケットの中から発炎筒を取り出して、真っ暗な倉庫内を照らした。

対空ミサイル一式が錆びた機械に固定されていた。少年はその側にある電源の落ちている操作装置を、馴れた手つきで操作してみせる。

起動しなかったため、数回ほど装置を蹴った。だが、起動しなかった。

どうやら、もうこの装置は死んでいるらしく、弾頭の補充は出来そうにない。

少年は機嫌悪そうに舌打ちした。

（収穫はなし、か……来ただけ無駄だったな）

内心で結果を蔑むように言って、

（やっぱり、古い兵装より新しい兵装を補充した方が良いな）

眉根を顰めながら、兵装について思案する。

（ソビエト連邦の空軍基地を襲撃・一時占領して、補充をするか。  
あの国なら、銃器も入手出来る）

次の目的地と、襲撃予定を決定すると、ブラックゴーストに乗り込んで、その場から離脱した。

12月25日 23時17分（グリニッジ標準時）

>>北朝鮮 軍事科学基地『地下39メートル』<<

特殊強化ガラスのカプセルが幾つも並んでいる地下施設内部。

薄暗い地下を妖しく彩る緑色に輝いている液体が凝縮されているカプセルの中には、裸体の人間が漂うように入っている。

キューブ状の管を体中に纏わりつかせている人間の入ったカプセルの前で、白衣を身に纏った科学者が数名で話している。

「中々上手くないモノだな」

「強化薬物を連続投与は、やはり人間には耐えられませんよ。精神が崩壊して、ゴミになります」

「死体は犬の餌にすればいい。今度は東洋人に投与する。この実験は成功させれば、我が北朝鮮は最強の軍隊になる」

「ですが、もし成功してしまえば、あの東洋人は大人しく服従しますかね？」

科学者は違う意見をそれぞれ言くと、すこしばかり沈黙して、

「所詮は女だ。実験前に精神が壊れるくらいまで犯せば大丈夫だろう。洗脳はそれからすればいい」

傲慢で陰鬱な声で科学者の誰かが言くと、科学者達は嘲るように笑った。

その近くのカプセルの中の液体に浸かっている人間は16歳程度の東洋人の少女だった。

細い華奢な腕や体に巻きついたキューブの隙間からは、気泡のよ

うなモノが出ている。

元々黒かった長い髪は灰色に変色しており、実験、拷問、軟禁過程で、すこしずつ白髪になりつつある。胸を見れば、真ん中から縦に切られた傷口の跡がある。

少女はすこし、瞳を開いて思った。

（もう、殺してほしい……）

悲しさを通り越した感情からの言葉だった。意志だった。

碧い綺麗な碧眼の瞳には、もう生氣は消えている。

少女の現在の立場はモルモット以下。人間には生まれた時から基本的人權が与えられているが、それは日本での話であり、北朝鮮、ましてやこんな独裁国家では適用されない。

思考が混濁を始めて、もう視界が閉ざされていく。

口からすこし大きめの気泡が溢れて、少女は意識を失う。

### 箱庭の少女パート3

12月26日 12時20分（グリニッジ標準時）

>>ロシア北東部空軍基地付近の街『スラム化した家の内部』<<

割れた窓ガラスの破片がボロイ家の中に散乱している。

足をすこしでも踏み出せば、ガラスを踏み潰す音が、ジャリ、と聞こえる。

黒いコート姿の少年は、片手に握られた古いタイプのハンドガン  
を正面の暗闇に向ける。

「武器商人だよな？」

暗闇の向こう側に向かつて、少年は訊いた。

「武器商人ではないんですがね。貴方様は東洋人ですか？こんな辺境な土地に珍しい……どんな武器がほしいんです？」

顔一杯にボロを纏った中年男性のロシア人が訊いてきた。

少年は眉根を動かさず、

「射撃精度と威力が安定した銃器がほしい。一番新しい型のサブマシンガンを2丁に自動式の狙撃用ライフルにレーザーサイト。予備の弾倉を各二つずつに弾薬を1キロずつほしい。あと、世界情勢の情報と物騒な軍事情報を教えてほしい」

銃を男性の心臓に向けながら、注文を言う。

男性はすこし眉根を顰めながら、何かを考える素振りを見せたが、すぐに承諾する。

「いいでしょう。ここでの最後の商売ですから、景気よくしましょう」

嫌な笑みを浮かべながら、男性は言う、少年は黒いコートの中から、ドルの札束を取り出して、男性に放った。

男性は札束を受け取ると、

「確かに」



と短く言つて、奥に歩いていく。

少年は銃を男性に向けたまま後ろをついていく。奥の部屋には色々な重火器が山のように置かれている。最新のアサルトライフルから旧式のライフルから手榴弾、対戦車用ライフル、対戦車ミサイルまである。

「好きなモノを持っていつてください。はい、これが世界地図と歴史表と私の持っている北朝鮮からアメリカの軍事情報です。では、これで失礼」

男性はそう言つと、一度頭を下げて、どこかに歩き去つていく。

少年はサブマシンガン>MP5<を2丁、自動ライフル>G3<を1丁、突撃ライフル>M4カービン<を1丁、ハンドガン>SIG/SAUER P228<を1丁とそれぞれの弾薬を1キロ程を外に擬似装甲を展開しているブラックゴーストに運んでいく。

武器の収納ケースに入りきらなかった銃器はコートの中に隠し持つ事にして、ブラックゴーストをそのまま垂直に離陸させて、一気に上空に舞い上がった。

地上からは、虹色の明るい光線が霧の中に引かれているように見える。

速度計測器には自動操縦と表示されている。

少年は武器商人から購入した銃器にレーザーサイトや弾倉の装着やら弾丸の装填する作業を済ませている。

銃器の作業がすべて完了すると、今度は世界情勢と軍事情報を綴ったファイルを黒い手袋をした片手で捲りながら読んでいく。

北朝鮮の東南国境線上の軍事科学基地での生体兵器の実験から、新型弾道ミサイル、新型ステルス機能から、ステルス潜水艦の建造の情報は細かく関心するモノがある。

少年は黒くすこし長く伸びた前髪を片手で捲くりながら、

「目的地の変更。場所は北朝鮮東南国境線上の軍事科学基地。破壊するべき場所だ」

短く命令する。ブラックゴーストは進路を変えて、速度1200

キロで飛行する。

1200キロは>擬似装甲<が展開出来る限界速度だ。これ以上の速度を出せば、擬似装甲が解除され、近隣の国のレーダーに捕捉されてしまう。

捕捉される事はまず避けたいので、少年は自動操縦に速度制限のプロテクトを掛けている。

なぜ、北朝鮮に進路を変えた理由は、生体兵器についてだ。人間に劇薬染みた薬物を大量投与する事で、脳の一部を変異させて、肉体の超人化を図り、感情から恐怖心を抹消する事で、突撃していく戦闘道具を作り出す研究。

国連安保なんたらという単語があつたが、それには引つかかっているのか、または見逃されているのかを確認するためにも、破壊した方がいい。少年はそう結論付けていた。

少年はすこし眉根を顰めながら、思案の色を浮かべる。

そして、作戦に関する命令を口にした。

「俺が降りた直後から120秒後に巡航ミサイルを打ち上げて、適当な箇所を爆撃しろ。サテライトもチャージもしとけ。サテライトの操作はすべて、ブラックゴーストから俺に移す。シグナル言語は『虹』に設定」

キャノピーには>了承<の文字が赤信号の点滅してるみたいに表示される。少年はサブマシンガン1丁とハンドガン1丁を黒いコートのポケットに入れる。

## 箱庭の少女パート4

12月26日 22時58分（北朝鮮標準時）

>> 北朝鮮東南国境線上の軍事科学基地<<

「おい、今遠くの方が光らなかったか？」

高台の監視施設の窓から、少将クラスの北朝鮮軍人が唐突に言う。  
リーダーを凝視していた兵士の一人は窓の外に目を凝らしながら、  
「気のせいではないでしょうか？リーダーには何も……」

「そうか、それなら良い」

少将の男がホッと息を吐くと、

「おや？もう疲れてんのか。情けないね」

階段に通じるドアを開いて入ってきた、片目に一文字の切り傷を  
刻んでいる隻眼の黒人が言う。

黒人は軍服を着服しておらず、迷彩服を着服。肩には暗視ゴーグル  
付きレーザーサイト装備のフルオート式アサルトライフルを担い  
でいる。

少将の男は機嫌悪そうに舌打ちをして、

「傭兵の分際で、気安く話しかけるな！アメリカ人ならなおさらだ」

「言うねー。だが、それは俺も同様だ。北朝鮮の軍人が気安く俺に  
言葉を吐くなよ。少将殿」

「貴様！」

軽い口調で言う黒人の男に、少将の男は激怒するように大きな声  
を張り上げた次の瞬間、黒人の男は肩に担いでいたアサルトライフ  
ルの銃口を、少将の男の心臓に突き立てる。

「金の支払いを素直にしてくれたから、俺がここに居るんだ。本当  
だったら、今頃は貴様を殺しているよ。少将殿」

少将の男は青ざめた。黒人の男の目に殺気がない分、余計に恐怖  
心が生まれる。

「ハワードを、き、貴様、こんな事をして、許されるとでも」

「許されないだろうな。だが、それは同じ軍人に適用される話だ。傭兵にそんなモノはない。それとな少将。俺のファミリーネームを気安く呼ぶなよ？貴様らが呼んでいいのは『ハインド』だけだ」

鋭さを秘めた眼光でそう言うと、少将の心臓に突きたてていたアサルトライフルの銃口を下げて、肩に担ぎなおす。

少将は早鐘を打つ鼓動を感じつつ、ハインドと呼んだ黒人の反対側を向いて、

「さっさと持ち場に戻れ。もらった金額分の仕事をしてもらわないと困る」

「おー怖い怖いっと。例の東洋人がここを襲撃する事を祈りながら、夜空の星でも眺めているさ」

「少将、いいんですか？あの男をあのままに置いて」

ハインドが階段を下りていくのを確認した兵士の一人が、少将を顔を見ながら訊いた。

「ふん、もちろんこのままにしておくつもりはない。だが、ここは泳がせる必要があるのだよ。泳がせる『必要』がな」

「例の実験が成就する過程に必要なのですか？」

「ああ、奴ほど最適な人間は居ないからな。まあ、今頃はまだ教育中なんじゃないか？あんな東洋人の女を犯して、何が楽しいのだろうな。あの研究者達は」

「しかし、苦痛を与える拷問よりは、精神的にダメージを与える方法としては効果絶大ですよ。ですが、生体兵器に頼るとは、我々軍人のプライドも地に落ちましたね」

「軍人は上の命令を聞いていればいい。余計な詮索はしない方がいい。それに、生物兵器は所詮は兵器・武器なのだから、兵器をどう扱おうが、我々の勝手でもある」

「生かすも殺すも、我々の自由、という事ですか。」

突然、リーダーに機影が映る。窓の外を見れば、一発の巡航型ミサイルは肉眼でも視認出来る。

明るいどの色とも違う光が、基地の中心から数キロ逸れた地点を爆撃した。そして、基地内に大きなブザーに似たアラームが鳴り響いた。

少将はすこし呆氣に取られつつも、

「どこの国の巡航ミサイルだ!？」

「すこし待ってください。　なんだこれは!？」

リーダーを見ていた兵士は驚愕した。そして、大きな声で、

「第2次世界大戦中の巡航ミサイルです!発射された場所は特定不明。周囲にジャミングが掛けられていて、他の基地に応援を要請出来ません!！」

「だったら、守りを固めろ!ここを破壊されたら、国そのものが不味い事になるんだ!」

少将が血相を変えた様子でそう言つと、兵士は首を上下に頷かせて、

『緊急発令!総員は完全武装で研究施設周辺を警戒しつつ、侵入者や空からの爆撃に警戒!』

野外スピーカーすべてから、大きな兵士の声が響いた。

慌てふためく北朝鮮兵を尻目に、アサルトライフルを肩に担いでいるハインドは、日本製の煙草を喫煙している。

煙草を口に咥えたまま、

「おー願いが叶ったな。どんな奴か、楽しみだね」と

実に愉快そうな含み笑いをしながらそう言つて、何もない夜空を見上げる。

## 箱庭の少女パート5

『どうだ？侵入者は居ないのだな？』

南側を完全武装で巡回している兵士が耳にしている無線機から、少将の声が訊いてくる。

「はっ！まだ視認出来ていません」

『警戒は怠るなよ』

そう無線機の向こうから声がすると、聞こえなくなった。

兵士は寒いのか、一瞬身震いをする。  
と。

後ろから、兵士は誰かに口を押さえられて、その場に押し倒された。

「この兵士は気配すら、察知出来ないのか」

そう冷たい声が聞こえた。その次の瞬間、首を刃物か何かで切り裂かれた。

赤い夥しい量の血液が地面濡らし、兵士は出血多量でショック死する。一度、ビクンと痙攣させると、首を裂かれた兵士は動かなくなった。

その様子を眺めていた黒いコートの少年の顔には、赤い血がベツトリと塗られていて、片手に握られている一振りのダガーナイフは銀色の光沢を闇に浮かび上がらせている。

まず、少年は今殺した死体の銃器を奪い取って、その場から研究施設に向けて、走っていく。

コンテナのような四角い資材で身を隠しながら、すこしずつ小走りで近づいていく。その時。

大きなブザーのような音が基地内に響き渡った。

どうやら、最初に殺した兵士の死体が発見されたようだ。

物陰に隠れていた少年は、軽く舌打ちをすると、30メートル付近まで距離を縮めた研究施設の入り口に向かって、全力で疾走した。

もう、悠長にやって居られなくなった。少年はそう思いながら、暗い階段を駆け下りていく。

人魂のように呆、と光っているライトに目も暮れず、少年は重たい突撃ライフルを両手に構えながら、駆け下りる。

下の通路が見えた。少年は階段がそろそろ終わる事を視認して、階段を降りて、明るい一本道の通路に出た。

その時、突撃ライフルを無造作に振り回した。

薙いだライフルの銃身を軽いステップで後ろに避ける黒人の姿。

少年は突撃ライフルを側に投げ捨てて、服の袖に隠していたダガーナイフを、黒人の胸部目掛けて振りぬいた。

閃光のようなダガーナイフを、黒人は肩に担いでいたアサルトライフルで防いでみせる。

ギリギリ、とダガーナイフとアサルトライフルが接地している箇所から鈍く聞こえる鏝迫り合いの音。無機質な殺意を秘めた表情の少年と愉快そうに口元を歪ませている黒人。

「お前が侵入者か？お仲間さんは居るのかい？」

軽いふざけたような口調で黒人は言った。少年は奥歯をかみ締めると、ダガーナイフでアサルトライフルを弾き飛ばした。

クルクルと回転しながら、通路を滑るように転がるアサルトライフルに、黒人は目も暮れずに迷彩服の腰の方から、ギザギザのダガーナイフを片手に握って、横に薙いだ。

ガキン、と刃物と刃物が衝突する音が通路に響く。ダガーナイフの斬撃に格闘術を硬軟に織り交ぜながら、互角の勝負を演じる。

一歩前に踏み込んで、一歩後ろに後退する。ダガーナイフの刀身からは、刃を交える度に線香花火のような火花が弾ける。

「いいねえ！最高だよ。東洋人にしては力もあり、スピードも度胸もある！」

悦びの声で、黒人は言う。少年はすこし黒い瞳を細めて、  
「見たところ、北朝鮮兵士ではないな」

こちらは冷めた声で言う。

二人の格闘は、まるでダンスでも踊ってるように軽やかだ。黒人は実に愉快そうに笑いながら、

「東洋人よ！お前はここの施設を破壊しに来たのか！？」

「そうだったら、何だ？」

ガキン、とダガーナイフとダガーナイフが再び激突して、鏖迫り合いになる。

黒人は唐突に表情から笑いを消して、

「そうか。なら、ここは『共同戦線』でもないかい？ここの施設はどうも気に食わない」

短く言う。少年はすこし眉根を動かすと同時に、黒人はダガーナイフを少年の後方の通路に投擲する。

直線距離を狂いもなく空間を切り裂いていくダガーナイフは、程なくして後ろまで迫っていた北朝鮮兵士一人の心臓に突き刺さった。兵士は痙攣しながら、通路の床に倒れる。少年はその場に落としていた突撃ライフルを拾い上げると、

「黒人、仲間じゃなかったのか？」

「俺は傭兵でね。気が向いた方に味方する方が、楽しいだろ？それに、俺は黒人じゃなく、ハインドだ。お前の名前は？」

ハインドと名乗った黒人も、アサルトライフルを肩に担ぎなおしながら、少年の名前を訊いた。

「ユウ……ユウ・アサムラだ」

漢字に直せば、『浅村・勇』である。ハインドはすこし納得するように唸る。

「俺はこの研究施設を破壊するまで付き合っぜ。早く先に進んだ方がいいかもな。どうやら、東洋人の女の実験が、そろそろ行われるらしいからな」

ハインドがそう深刻そうに言うと、ユウと名乗った少年と並走しながら、通路の奥に走り進んでいく。

ボンヤリと見える照明は、ただ眩しかった。



手術台に腕や足を固定されていて、身動きが全く取れない。衣服は着服してない。さつきまで、性的暴力を受けていた。

凌辱されていた。全身に痺れたような感覚がする。少女の晒された裸体の横には、ステンレス台に無数に置かれている注射器がある。酷く、気分が悪い。呼吸が上手く出来ない。少女の思考には、『死にたい』の一言だけだった。

ドアの前に居る白衣を着た科学者数名は何かを話している。

もちろん、少女には科学者の声は聞こえない。

碧眼は焦点が合っていないのか、虚ろな瞳。呼吸する度に上下に小さく動く胸部の肌の色は白かった。

科学者の一人が、碧眼の少女の横に立つと、注射器を手取る。

「今から打つのは、ちよつとした劇薬だね。激しい痛みを伴うが、あれだけ犯されれば、快感に思うかな？」

その科学者の言葉は、少女には聞こえていない。

少女は碧眼から涙を流す事で、答える。

注射針が、皮膚に触れた瞬間、

ガキヤ、とドアが蹴り飛ばされる。

ドアの向こう側から、数発の銃声と銃弾が聞こえた。そして、科学者の男は頭に風穴を開けて、その場に倒れた。息絶えた。

銃声が鳴り止むと、ドアの向こう側から、黒い髪の少年、ユウが入って来て、両手に抱えていた突撃ライフルで、少女の体を固定していた金具を撃って、破壊する。

ユウは少女の顔に視線を向けると、着ていた黒いコートを少女に被せて、そのまま肩に担いだ。

「おい、早く逃げるぞ！？これ以上はさすがに不味いからな！」

ハインドの怒鳴りに似た大きな声が聞こえると、ユウは突撃ライフルをその場に放り捨てて、ズボンのポケットの中から、ハンドガンを取り出すと、全力で出口まで走る。

走る度に少女の体は揺れる。前方の通路からは来る北朝鮮兵を手握っているハンドガンで撃ち殺しながら、やっとの事で出口に到

達する。

出口の付近はすでに北朝鮮兵や武装装甲車などに囲まれており、逃げる事は皆無か無謀に近かった。ハインドはやや気まずそうに、「俺は逃げれる自信があるが、ユウはそんな少女を抱きかかえながら逃げれるのか？」

心配しているのか？ユウはやる気のなさそうに辺りを見渡して、「逃げれるだろうな」

ユウはそう素っ気無く言っ、ハンドガンポケットに入れて、黒い手袋をつけた片手で片耳を押さえた。

「サテライト・シグナル言語『虹』」

短くそう呟いた。すると、上空から、虹色の閃光のような光が、密集している北朝鮮兵のど真ん中に突き刺さって、爆発した。

ハインドは呆気にとられながら、

「何だ？今の光は？」

「戦闘機の兵装」

ポツリとユウは答えた。

それから約2秒後、上空から黒い戦闘機が、出口のすぐ正面に着陸した。キャノピーは勝手に開く。

ユウはハインドに目を暮れずに、黒い戦闘機に駆け寄って、コックピットに乗り込んだ。

キャノピーを閉じて、ジュネレーターをすべて起動させる。黒いコートを被せた少女は片手で抱きながら、高速で離陸した。

急速に遠ざかる黒い戦闘機>ブラックゴーストくを見上げていたハインドは、

「なるほど、それほど馬鹿な奴じゃなかったようだな。俺も逃げない和不味いね」

愉快そうな含み笑いを浮かべながら、基地内のどこかに走っていく。

12月26日 23時39分（北朝鮮標準時）

>>北朝鮮ピョンヤン上空 高度1000メートル<<

「すこし痛い、我慢しろ」

ユウはそう短く言うと、虚ろな碧眼の東洋人の少女の細い首に、手に持っている注射器を刺して、何かの液体を注入する。

少女は無機質な無表情で、

「な、にを……う、つ、た、？」

途中で何度も途切れた線の細い声で訊いた。

「研究施設にあった。劇薬を打ち消す効果のある精神安定剤。国籍は……日本人か？」

ユウの質問に、少女はすこし小首を傾かせて答える。  
すこしだけ。

少女の碧眼に生氣のようなモノが映った。少女は小声で短く、

「名前……教えて」

「ユウ・アサムラ。お前は？」

「忘れた……」

黒いコートを白く細い手で、すこし強く握り締める少女。すこし震えている少女を見ていたユウは、キャノピーに映る空を見上げながら、

「古い誰かさんに、ユウナって名前の奴が居たな」

昔の事を思い出す。白黒の集合写真に写る空軍日本兵の中に、一人だけ女性が居る。

ユウナは漢字で書くと、『優菜』と書く。

少女は大人びた顔をすこしだけ上げて、

「……ユウナ？」

「それ、やるよ。名前がないよりはマシだから」

ユウがすこし優しい口調でそう言うと、ユウナと名前をあげた少女は、ユウの黒い半そでのシャツを片手で握り締めて、

「……うん」

と、短く言うと瞼を閉じる。

スースーと寝息を立てているユウナの死んでいるような安らかな寝顔をすこし眺めて、世界一平和で恵まれた国の日本にブラックゴーストを飛ばした。

## 冬の雪パート1

12月27日 3時25分（日本標準時）

>> 秩父山中<<

すこしだけ開けた場所にブラックゴーストが着陸している。

ブラックゴーストの右舷ウィングの辺りに、ユウナと名前をあげた少女は、ユウに背負われてスースーと寝息を立てながら寝ている。失礼な言い方であるが、ユウナは非常に軽かった。

当然、標準的な女性の体重を基準しての『軽い』という事だ。

大体の予想では、体重は37キロ前後。見た目は痩せこけていないが、実験過程で肋骨の数本が抜かれているんだろう。

（まずは、こいつの服と情報か）

背負いながら後先の事を内心で考える。山中を下山すると近場の街で服を調達する事にした。

服を売買している閉店した店のガラスを鉄パイプでガラスを叩き割って、手頃なシャツとサイズがわからないのでスカートとコートを盗んだ。

修理代程度は店の中に札束で置いておいた。利害関係はちゃんとした方が良さそうっての行動だ。

黒いコートを被って寝ているユウナの頬を軽く叩いて起こして、盗んできた服を着服してもらう。服を着服すると、ユウナは綺麗な碧眼を眠たそうに開きながら、

「寝ない、の？」

数時間前よりは綺麗な発音になった言葉でユウに訊いてくる。どうやら、心配してるらしい。

ユウはさっきまでユウナに被せてあった黒いコートを着服しながら、

「もう、眠り疲れたからな」

ズボンのポケットに入れていたハンドガンをコートのポケットに入れなおす。話すのは苦手だ。

どうも、ユウナにはサイズがすこし大きかったようで、白いシャツの袖は手のひらを隠し、灰色のスカートは膝下まで隠し、白いコートは足首まで長さがあった。表情があまりないユウナは、どうでも良さそうにも見える。

ユウナは靴を履いていないため、一步、歩く度に寒そうにすこしだけ口元を歪ませる。

ユウはその様子をすこし見ていたが、さすがに他人に見られると不味いと思い、ユウナの片手を掴んで、ユウナを背負った。

ユウナはすこしキョトンとしながら、

「歩ける、よ？」

「出来るだけ早く駅に行きたい。偽造書類と戸籍も用意する仕事もあるしな」

「偽造？」

「日本の高等学校に編入するための書類に日本国籍を証明する戸籍作りだ。世界一平和ボケした国に慣れるにはもっとも最適な方法だと思っただが」

ユウがそう淡々と答えると、会話はそこで終わる。

明かりのない街並みを眺めながら、駅に向かって歩いていく。しばらくして、吐く息が白いのに気付いた。

「眠る」

と短くユウナは言うのと、またスースーと寝息を立てる。背負われた感じが揺りかごのような感覚がした。

程なくして、まだ始発も運行していない駅に到着した。

寝ているユウナは駅に設置されているベンチに寝かせて、ユウはその横でハンドガンとサブマシンガンの弾倉に装填されている弾丸の数を数えて、安全装置を入れた。

すこしだけ、夜空が明るくなってきた。

12月28日 14時37分（日本標準時）

>> 北海道新千歳国際空港ロビー<<

『羽田行き906便にご搭乗の方は 』

新千歳空港のロビーに流れる女性の声のアナウンス。

沢山の人が入り乱れているロビーに、釣竿でも入れているのか、と思わせる細長いバッグを肩に担いでいる黒人の男性の姿がある。

身長は180センチ以上で、体躯は良い。黒塗りのバックの中身はアサルトライフルである。

数日前に、北朝鮮の国境から中国まで逃げて、現在に至っている。黒人男性の名前はハインド・ハワード。

元海軍所属の中佐の経歴を持っている。

武器の持ち込みは容易であった。買収すれば、簡単に検問を通過出来るのだ。

けれど、それは決して簡単な事ではない事を、ここに言っておこう。

ハインドはロビーから雪の積もっている外に出ると、煙草を灰色のコートの胸ポケットから、一本だけ口に咥えて、ライターで火を点ける。

（世界一安全を約束された国か）

そう、日本はアメリカに平和条約を結んでいるため、見返りとして平和を約束されているのだ。

（まあ、休暇を過ごす場所としては、もっとも適しているな）

内心でそう言っていると、口から煙草の白い煙を吐き出した。空港前で停車している一台のタクシーに乗り込んで、

「運転手さんよ。ここから一番近いホテルまで行ってくれ」

「外人さん。あんた、日本語上手いね」

運転手はそう言っていると、タクシーを走らせる。

「語学はちゃんと覚えてないと、仕事が出来ないからな」

「通訳の仕事ですか？」

「まあ、そんなもんだな。中々、スリルと迫力に満ちた仕事だよ」

「それは楽しそうですね。私もそんな職に転職したいですよ」

「同業者はみんな歓迎さ。運転手さん、あんたは良い人決定だ」

軽い口調でハインドは言つと、運転手はバックミラー越しで、

「どうも」

と短く言つた。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5776a/>

---

蒼空のユウ

2011年1月22日15時18分発行